

良いモノの

「良さ」

を伝えるために

森田嘉左エ門商店

森田 徹さん

来月開催されるクラフトマンスデー。そこに参加される森田さんに今回はお話をお伺いしました。

老舗だからこそ

森田嘉左エ門商店は文政11年創業。大川市小保で180年以上続く老舗です。先代までは漆塗料の卸売をメインとしており、漆製品の製造販売を行い始めたのは、森田さんからとのことでした。

「高三の時に将来の選択を迫られました。片方は家業である漆関連の、もう片方は全く違う業種です。悩みましたが、先々のことを考えると、いずれは大川の地に戻ってくるだろうと思いついて漆関係の学校へ進んだことにより、漆製品の製造ができるようになりました。代々続いてきてい

ますが、商品が作れるようになったのは私が最初ですね」
漆塗料販売では森田さんが七代目になられるとのこと。

「老舗を守っていけと言われますが、どこの老舗も残っていたら、今の世の中の中はなっていないと思います。だからこそ続けていくことは難しいですし、これからのように生き残っていくか模索しています」

昔から漆に関わる仕事を目指していたのではなく、漆の世界に挑戦したいことを見つけた結果、この道に進まれた森田さん。

「高校を卒業してすぐ香川県の漆芸研究所へ進みたかったんですが、準備不足だったため、一年目は落ちてしまいました。その時、豊前市に研究所卒の先輩が開いている教室があることを知って、そこへ1年間通ってから研究所へと



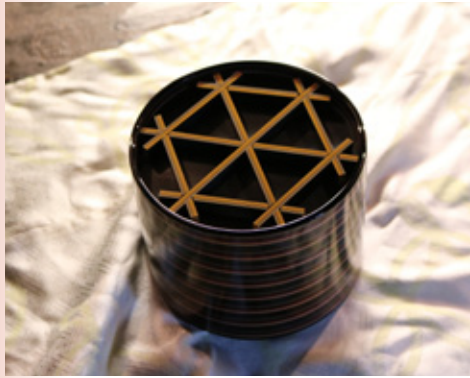
店内に並べられた漆器



進みました。小さい頃から器用だねと言われてきました。この業界に入ってからには桁違いの器用な人を見てきました。私の先輩も5ミリの紙で鶴を折れます。私が10努力してできることが1の努力でできる人を見ると、なんでだろう？とか向いていないかもしれないなと思います。続けていけばなんとかなるだろうと思っていた部分もありましたが、少し認識が甘かったです。私もあります。どれだけ訓練しても追いつかないこともありました。それでもそういう人になる目を養えたのはよかったなと思っています。その違いすらわからない人もいますからね」

現代にも対応した漆器

幾何学模様などの柄が描かれた漆製品を得意としている森田さん。特徴などはあるのでしょうか。



漆を百層以上塗り重ねて作られた作品

「木地に漆で模様を描いて、塗って研ぎ出すと柄が出ます。これは彫っているのではなくて、漆で厚みを出して柄を描いていくのです。紅い漆の上から黒い漆を塗って研ぎ出していきます。この技法は十年ほど前に辿り着いたオリジナルであります。漆はつるんとしたイメージで劣化しやすくもありました。使うほどに見すばらしくなっていくので、どうにかできないかと研究に研究を重ねた結果、傷つきにくいものを作ることができました。物によつては、漆器の上でナイフとフォークを使って肉を切っても傷つかないです。またこの漆器はずっと使っていくうちに劣化するのではなく、艶が出るものでもあります。漆は本来さらさらしたのですが、タンパク質を加えると固くなる性質があります。凹凸をつける技法は昔からありますが、しっかりと厚く盛り上げた状態で仕上げるのはすごく難しいです。

漆は乾くと縮む性質があるのですが、厚く塗れば塗るほどにちりちりとした縮みが発生します。それをいかに出さずに、綺麗な状態に仕上げるのが鍵ですね。普通の漆塗りの厚みは0・03ミリほどですが、その倍以上の厚みを出しています。その厚みがあるからこそ、傷つきにくい漆製品が生まれました。この製品を開発できたから、胸を張って漆器は現代社会にも対応できますと言えます。開発できていかなかったら漆職人を続けられていなかったかもしれないですね」

「取り扱いが難しいイメージのある漆製品。森田さんに伺ってみると、そうではないとのこと。」

「漆器を拭き上げさせられた方々は、どうしても扱いにくいというイメージが刷り込まれているので、なかなか使ってもらえないです。でも実は洗剤を使ってもじゃぶじゃぶ洗っても大丈夫なんです。また漆器は塗り替えが出来ますが、今の時代は塗り替えるよりも新しく購入したほうが良いこともたくさんありますし、私自身、それに苦しみられた時期もありました。修理して下さいと簡単に言われることもありましたが、物によつては修理が高つく事もあるので、最近では受け入れられない物にしています。漆器は漆以外の塗料も使って短時間で仕上げる大量生産も可能です。でも職人として、自分にとっての付加価値がなければいけない。どれだけ手間暇がかかったとしても、それが付加価値だと思っています」

漆器の良さを知ってもらいたい

職人として名前を知られることにより箔がつく業界だともお話された森田さん。

「自分の名前を広めていきたい気持ちも多少はあります。今店舗に来てくださるお客様は、大川では藩境まつりに通って見つけてくださった方が多いですね。豊前でも展示会を開催していますが、毎年来てくださる方もいますし、その方たちの口コミで知ってくださっている方も多いです。ただ数を作れないので、たくさん来てくださっても対応できない部分も正直あります」

大量生産をすることよりも、ひとつひとつ丁寧な製品づくりを心がけている森田さん。そんな森田さんの夢、また目標はなんでしょうか。

「まずは漆器の良さを知ってもらうことが大事だと思っています。日本人の悪い癖で、良い物を買ったり頂いたりすると、つい大事に仕舞いがちです。使ってくださいよと言っても、いやいや勿体無いって。それでは意味がないんです。私自身もそうですが、普段から良いものを



使っていないと、いざそれを出した時にうっかり壊してしまうんです。その時、普段からいかに物を雑に扱っているのかもわかります。今は良い物を使おうと心がけています。それから、とにかく漆製品の認知度をもっと上がってくれば良いなと思います。また知られていくなかで、使いたいというイメージを払拭していきたいですね」